

동아시아학과

DEPARTMENT OF
EAST ASIAN STUDIES

东亚学科

熊本学園大学外国語学部東アジア学科



バックナンバー

News Letter 第30号

2022年6月1日発行



■ 巻頭言

熊本学園大学外国語学部准教授
東アジア学科長 小笠原 淳

今年4月より東アジア学科長に
就任しました小笠原淳です。専門
は中国語圏の現代文学で、授業で
は中国語入門、中国語翻訳などの

科目を担当しております。1990年代に約4年間北京に
留学し、その後台北、パリと長期間の留学を経験してき
ました。無知で未熟だった私を成長させてくれたのは、
紛れもなく東アジアでの多様で困難な経験と、そこで出
逢った友好的な人々でした。

東アジア学科が学びの対象とする、韓国と中国・台湾

□ ■ □ 学科の最新ニュース! □ ■ □

4月に新入生59名(募集定員50名)を迎え、新年度
がスタートしました。東アジア学科で学ぶことを熱望
していた学生諸君ばかりで、高い目的意識をもって
新しい言語の学修に励んでいます。

などの地域は、日本と一衣帯水の隣国であり、多くの文
化を共有し、強いつながりを有しています。私たちは意
見の相違を認識しつつも、交流と対話を続け、一層友好
的な関係を築いていく必要があります。

東アジア学科では専門性の高い教育を通じて、日韓、
日中、日台の架け橋として活躍する人材を多く輩出して
きました。これからも一層努力し、九州における東アジ
アの研究・教育拠点を担うべく邁進してまいります。よ
ろしくお願い申し上げます。请各位多多关照!

□ 研究紹介——地図を作り言語の過去の生態を探る

言語地理学という学問分野がある。それは地域による
言語の違いを地図に落とし、単語などが使われた地域
を定め、分布を解釈する学問である。19世紀後半に生ま
れた。朝鮮語学では主に単語の地理的分布から過去の言
語の生態を解明するのに使う。

1945年、日本が朝鮮から引き揚げるまで、小倉進平(京
城/東京帝国大学教授、1882-1944)や河野六郎(京
城帝国大学助教授/東京教育大学教授、1912-1998)とい
った日本人研究者が京城帝国大学を拠点に朝鮮半島全
域にわたって方言の調査をした。その結果は様々な論文と
して残された。河野六郎(1945)『朝鮮方言学試攷-「缺」
語考-』は、言語地理学の方法を使った朝鮮半島の方言
の考察で、その最後の成果と言える。

それらの成果は、十分活用されないまま眠るかと思
いきや、2018年春に東京大学大学院人文社会系研究科韓国
朝鮮文化研究室から、小倉進平『朝鮮語方言の研究』所
載の朝鮮方言を地図に記入し、その大学院生や研究者
が解説を加えた二冊の冊子が公開された。

編者の福井玲先生から郵送していただいた第1集を開
いたとき、思わず「おおー」と声をあげた。今までの読
み取りにくかった白黒の地図も鮮やかなきれいな色刷り
の地図に代わり、分布がとてわかりやすい言語地図と

東アジア学科教授 矢野 謙一 (朝鮮語学)

なっている。しかも、解説には「語形の分類」「語形の分
布」「文献上の記録」「考察」「参考文献」が書かれている。

以来、私は、暇があれば、この冊子を手手にしている。ま
ず言語地図を眺め、語の分布と伝播、周辺分布、同音衝
突などの原則に従い、地図を読む。また山地や河川など
の自然地形を重ね合わせる。語の表記を見ながら、かつ
て聞いた方言の音、話し手たちの口の動きなどを思い出
す。文献上の記録はノートに写し、年号を入れる。その
上で垣間見られる北朝鮮の方言学や言語地理学の成果を
メモし、必要ときは簡潔な地図を書いてみる。そして
地図を眺め、単語の過去の生態を想像し、自分なりの解
釈を考える。最後に冊子の「考察」を読む。読んで、微
笑むこともあれば、唸ることもある。

言語地理学の原則では、単語にはそれぞれ固有の歴史
があり、語によって別々の地理的分布を言う。簡
単に聞こえるが、単語の数だけ歴史があり、分布は複雑
で、うまく解釈できる語に出会えるのは稀なことである。
言語地図は言語の歴史の変遷を地理的に平面的に投影し
たものである。それを見ながら、単語の過去の生態を立
体的に組み立てなおすのは簡単ではない。記録に残った
語形の変遷の過程を定め、言語地図を眺め、頭をひねる。
その繰り返しである。

■ 「出張日記」に代えて

新型コロナウイルスの影響で、学会がオンラインで開催されることも日常のこととなってきた。調査や学会発表に行けない日々が続いているものの、オンライン化でよかったこともある。わたしの趣味は語学なのだが、今は様々な語学講座がオンラインで開催されており、熊本にいても受講可能である。2021年度はベトナム語、インドネシア語、モンゴル語を受講した。語学の勉強には予習、復習が欠かせない。忙しさにかまけて勉強を怠ってしまった日には、学生たちに言ってきた言葉が自分自身に跳ね返ってくる。だがやはり、新しい言語を学ぶ楽し

東アジア学科講師 黒島 規史（韓国語文法）

さ、大変さを改めて実感できるのは、語学を教える者にとっては必要なことなのではないかと思う。実際に講師の方や他の参加者に会えないのは少し物足りない気もするが、全国から集まった、様々なバックグラウンドを持つ方たちと語学の楽しさを共有できるのはうれしい。前年度は少し欲張りすぎたので、今年度はインドネシア語のみ継続することにした。今、この記事を書いているのが新学期開始直前。今年度も新入生と同じく新たな気持ちで、学生たちと語学の勉強に励みたい。

□ 東アジアへのまなざし——自国民のための異文化理解を優先して

韓国も日本も、少子高齢化によって人手が足りなくなって久しい。コロナ禍直前の韓国の外国人数は 252 万、日本は 293 万人に達している。外国人の手を借りなければ、農漁村をはじめ基幹産業を動かすのが難しくなっている。これと関連して「多文化共生・共創」関連学科が日本の東京大学、大阪大学、九州大学などで開設されたが、韓国でも全国 20 余りの大学に多文化共生プログラム講師の養成(ABT)学位課程が開設され、関連単位認定大学だけでも 46 大学にのぼる。

韓国の多文化共生政策の中で注目に値するのは「結婚移民者のための早期適応プログラム」である。計 3 回に

東アジア学科教授 申 明直（韓国文学・文化）

わたって実施されるが、1 回目のプログラムでは先輩の結婚移民者をメンターにした様々な先輩のアドバイスを中心に、2 回目のプログラムでは結婚移民者ではなく結婚移民者の夫と家族を対象に、結婚移民者の出身国の文化紹介を中心に展開される。外国人の早期適応のために必要なのは外国人のホスト国家の文化に対する理解ではなく、異文化に対する自国民の理解という点が特に強調されたようだ。考えてみると、多文化共生とは、自国文化を教えようとするのではなく、異文化を学ぼうとする姿勢から始まるのかもしれない。

■ 新書紹介 榎本英雄・范晓 著『ニューエクスプレスプラス 上海語』白水社（2020年）

白水社の語学書、エクスプレスシリーズはマイナー言語にその本領を発揮する。中国語の方言である上海語や広東語、台湾語もこのシリーズに収められている。大学時代、初めて手にしたエクスプレスは『エクスプレス上海語』（1987年）で、発音練習用に挙がっていた上海の固有名詞は今でも諳んじることができる。復旦大学「ヴォッターダーオツ」（標準中国語でフータンターシュエ）、玉仏寺「ニョオツヴァッズー」（ユイフォーサー）。上海留学時に現地の学生にこの本を使って上海語を話したら面白がってくれた。方言を話す外国人というのは、けったい（関西方言で奇妙）だったのだろう。方言は現地の人々の気持ちが宿る生活に根差した話し言葉だから、挨拶や、嬉しい時、驚いた時の感情表現に方言を使うと相手との距離がぐっと縮まる。ただ、習熟し

ていない方言で道を尋ねるのはよした方がいい。相手の返答が聞き取れなくて結局、共通語で問い返すことになるうから。

東アジア学科准教授 野田 耕司（中国語学）

■ 編集後記 ■

- 半導体生産最大手の台湾積体回路製造(TSMC)の熊本県菊陽町への進出決定は、東アジア学科の学生にとっていいニュースとなりました。学生たちが本学科で修得した言葉を使って活躍する姿を、いつも夢見ています。(J)
- ニュースレター電子版(バックナンバー)の掲載を開始しました。QRコードから外国語学部ホームページにアクセスし、バナーをクリックしてご覧ください。



発行者 熊本学園大学外国語学部東アジア学科
編集人 小笠原 淳（東アジア学科長）
〒860 - 8680 熊本市中央区大江 2-5-1
Tel 096-364-5161（代表）